

学びの自分事化に向けた地域大学における取り組み

仁平晶文

社会心理学者クルト・レヴィンが残した「良い理論ほど実践的なものはない」ⁱという言葉聞き、腹落ちする大学生あるいは大学卒業生はこの世の中にどれだけ存在するのであるか。この問いは大学教員にとって諸刃の剣となりうる危うい問いである。裏を返せば、世の大学は良い理論を実践できる人材を育成し、社会に向けて輩出できているのか、という問いに他ならないからである。

2023年度の大学進学率は過去最高の57.7%を記録しⁱⁱ、大学・大学院卒業を最終学歴とする国民の比率は25%を超えているⁱⁱⁱ。こうした状況の中で、地域に立地し、地域住民から進学先として選択され、地域に人材を輩出する地域に根差した大学（以下、地域大学）が果たすべき責任、とりわけ教育機能を果たす責任の重さは増している。地域大学における人材育成の成否が、地域の経済発展や課題解決の成否に影響を与えると考えられるからである。

大学が果たすべきもう一つの重要な機能は研究機能である。研究機能の果たし方はいくつかの方向性がありうる。新知識の創造を目指し、研究を展開していく方向性もあれば、学界の知の蓄積の中から実践に耐えうるような良い理論を見極めるといった研究の方向性もあるだろう。以下、本稿では、後者の研究の方向性の立場から議論を進めていきたい。

大学は教育機能と研究機能を同時に果たすことで社会に奉仕し、それができてはじめて社会に対して存在意義を示せるようになる。地域大学が教育と研究という2つの機能を高い次元で両立しながら果たしていく際の鍵概念となりうるのが学びの「自分事化」である。

地域大学で学ぶ学生が、大学で学んだ知識や理論を、机上の空論に終わらせることなく、地域で実際に生じている課題に結びつけながら実践し、自分のものとしていく^{iv}。こうした意味での、大学での学びの「自分事化」をいかに支援していくのが地域大学の使命となる。

地域大学の教員は研究活動の中で見極めた良い（と思われる）理論を、教育活動の中で学生に教授する。理論を教授された学生は、地域で生じている実際の問題に理論を適用し、理論の実践を試みる。教員はその実践を支援しながら、理論の更なる深化を図っていく。

理論の教授・実践・深化を複数の地域大学が連携しながら展開し、地域の活性化につながる道もありうる。その一例が、千葉県インターンシップ推進委員会主催のビジネスアイデアコンテスト「千葉限定キャリアインカレ」である^v。

このコンテストの特徴は千葉県内に拠点を置く企業が現実には直面している課題がテーマとして示され、その課題を解決するためのビジネスプランを千葉県内の高等教育機関に在籍する学生が提案するところにある。

筆者が指導を担当するゼミナールでは第2回のコンテストから参加し、ゼミ学生には地域企業がビジネスを展開している実際の現場に赴き、自らの五感を駆使して得られた知見、すなわち、課題に主体的に近づくプロセスで得られた知見を大切にすることを要請してい

る。知識や理論の「自分事化」を越えて、課題の「自分事化」を要請しているといっても過言ではない。

現代社会に暮らす人々は SDGs に代表される社会的課題の「自分事化」を強く要請されてはいるものの、ともすれば「他人事」にとどまりがちである。社会全体で学びの「自分事化」と社会的課題の「自分事化」を同時に展開していくことが重要となるであろう。

ⁱ Lewin, K. (1943), “Psychology and the process of group living”, *Journal of Social Psychology*, Vol. 17 No. 1, pp. 113-131.

ⁱⁱ 文部科学省「学校基本調査」

https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/2023.htm

ⁱⁱⁱ 総務省統計局「令和2年国勢調査」

<https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2020/index.html>

^{iv} Dewey, J. (1938), *Experience and Education*, The Macmillan Company (市村尚久訳 (2004)『経験と教育』講談社)

^v 千葉県「[千葉県インターンシップ推進委員会]主催のイベント情報等について」

<https://www.pref.chiba.lg.jp/koyou/wakamono/internship.html>